



その昔・伊万里に有田町があった



昭和29年4月17日、有田小学校で有田・東有田両町合併祝賀式典が行われた

いま「よりよい市町村合併をめざして」各地でシンポジウムが開かれています。

先般（1月24日）、篠原有田町長をはじめ井本佐賀県知事、川本伊万里市長、岩永西有田町長をパネラーに公開討議が行われました。合併により ①日常生活圏の拡大 ②地方分権 ③少子高齢化への対応 ④厳しい財政状況に伴う構造改革が推進されることでしょう。（県資料）

大正10年（1921）刊の「西松浦郡誌」によれば「有田町は松浦党一族「有田氏」の領域にあり深山幽谷、今から760年程前（現在より840年前）に源為朝が黒髪山下白川で大蛇を退治して民害を除いた後、天正の末頃（1590）朝鮮半島より帰還した者により南川原山で陶窯を創業したのが、有田町開発の遠源で、その頃は「田中村」と称し、今の岩谷川内辺りが僅かに開けているに過ぎなかった。そして元和～寛永（1615～1643）の頃、李參平が泉山の白磁鉢を発見してより人煙多忙の区となった。当時、治領「有田氏」に因み「有田皿山」と称していた」とあります。「有田町」となったのは明治22年です。

一方、「伊万里町」の頁を開いてみましょう。聖武

天皇が天平12年（761）飯麻呂の地に祖神を祀ったことから「伊万里」となった。豊太閤の頃、朝鮮半島への出兵供給基地となり、のち「やきもの」の輸出港として繁栄をきわめました。

有田皿山より腰岳の半腹を経て萱村金谷を過ぎて本町に入り、通路は陶器諸店が軒を並べて「有田町」と称していたとあります。

お読みになっておわかりのように、有田の名前が双方にあり、江戸初期から明治・大正・昭和4年まで「伊万里有田町」と言っていました。即ち「伊万里有田町」と「有田町」が40年余りも併存していたのです。ところが郵便誤配をはじめ、多くのトラブルが続きました。このため昭和4年「伊万里有田町」は「元町」と改めました。今の伊万里の中心地です。

このように歴史をひもといてみると、面白い史実を発見することが出来ます。

合併には、必ず不都合なことも出てきます。しかし、不都合なところを解決してゆくことで、住民主導による「陶都」にふさわしい平成の大合併が実現するのではないのでしょうか。

（久富桃太郎）



有田町史（通史編）「有田町・有田村」の誕生を見れば、明治元年有田皿山代官は皿山郡令と改められた。明治4年廃藩置県で伊万里県ができたが翌年に佐賀県と改称され県庁も佐賀へ移っています。

そして有田地方は第1小区泉山町（枝町に上幸平町・大樽町）、本幸平町（枝町に赤絵町・中野原町）、第2小区有田新村（枝町に外尾山村・南川良山村・黒牟田村・応法山村）、曲川村に分けられた。

明治11年、これらは有田皿山・新村・曲川村となり明治22年（1889）4月1日に有田皿山は有田町になり、新村が有田村になったのは明治29年であります。

季刊

皿山 春 No.53

有田町歴史民俗資料館・館報

シリーズ ザ・陶器市 陶器市物語 その1

～100回の歩み～

平成15年5月に、栄えある100回目を迎える陶器市。それは有田の年中行事としてだけでなく、日本の風物詩としても全国ニュースで流れるほどに有名な行事となりました。でも、最初から現在のような大規模なものではなかったのです。そこには、第一回目を行うに当たっての人々の意気込みや、大正4年に蔵ざらえ（陶器市）を始めた人々の努力、そして毎回どうしたらよりよい陶器市になるかということに取り組んできた有田の先人たちの奮闘の歴史がありました。

そこで、この100回の歴史を振り返り、先人の偉業に感謝するとともに、これからの陶器市のあり方を考え、新しい21世紀の陶器市のスタートに備えていただければと思います、陶器市の歴史をシリーズで紹介していきます。

明治中頃の有田

明治の中ごろ、当時の有田皿山を取り巻く状況はどのようなものだったのでしょうか。明治初めの海外輸出のブームが去り、明治24年の佐賀新聞によれば、「内外輸出版売高は著しく減少」し、同26年には「石場騒動」が沈静化した後の、事業改良の必要性から有田商工会が発足しました。また、翌27年には「有田内外山規約」が結ばれ、石場騒動に揺れた人々の心も落ち着きを取り戻しました。

しかし、明治28年に京都市で開催された第4回国勧業博覧会での審査評は「陶磁器の本場とも称すべきものなれど、依然旧株を守り、少しも進歩したると云うべからず。寧ろ旧に安ずるものなり」という厳しいものでした。この時の不成績によって、惰性の眠りから目を覚まされた有田の人々は、技術の改良の必要性から「有田徒弟学校」の設立を、また全国に率先して陶磁器標本を陳列、各自の技術の競争、もしくは知識を増進し、もって時勢の必要に対応するために「民設管内陶磁器品評会」の開設を計画したのでした。

品評会＝陶器市の始まり

今では「陶器市」の名称が一般的ですが、そもそもは明治29年3月1日から5日にかけて開催された「有田五二会陶磁器品評会」という名称でした。この五二会まなというのは、旧薩摩藩士前田正名の主唱によっ

て始められた殖産興業運動の結果生まれたものです。明治28年9月、九代深川栄左衛門と田代呈一が発起人となって趣旨書及び品評会規則が発表され、一般陶業者の賛同を呼びかけました。



九代深川栄左衛門さん
(深川泰子さん提供)

翌年3月1日、本幸平の桂雲寺で初日を迎えた品評会は午前9時、一発の煙火を合図に関係者一同が着席し、開会式が始まりました。本堂には所狭しとばかりに火鉢や香炉・皿・茶碗など784点が並び、見物客でこった返しの様子が当時の新聞記事に記されています。141人の出品者の内、受賞者は次の通りでした。

▲一等賞

・香蘭合名会社 ・辻 清 ・精磁合資会社
・深川忠次 ・樋口治實 以上5名

▲二等賞

・藤崎太平 ・田代與一 ・今泉藤太 ・宮崎竹二郎
・辻重之助 ・池田光次郎 ・佐々木伸太郎
・金ヶ江頼四郎 ・富永源六 ・青木甚一郎
・藤本関三 ・松本重助 ・江上熊之助 ・西山盛太郎
・城島岩太郎 以上15名

▲三等賞

・深川常蔵 ・林源吉 ・百田理三郎 ・久富季九郎
・藤井寛造 ・城島栄吉 ・鶴田六郎

記 録

こんな展覧会を開催しました

◎20世紀の残像 ～そこにあなたの姿がありますか
〔期間 平成13年11月23日～12月24日〕

明治34年(1901)から平成までの有田の変遷を、230点の写真で紹介しました。中でも、昭和初期の有田高等実業青年学校の授業風景や校舎、先生方の写真は、懐かしいという感想を述べられる方が多くいらっしゃいました。また、松隈校長の子息・松隈哲朗氏が福岡在住で、蒲地昭三当館協議会会長からこの企画展のことを教えていただいたと来館され、父親との“対面”を果たされました。

◎カルタの世界～さあ、みんなであそびましょう
〔期間 平成14年1月11日～1月31日〕

カルタがポルトガルから日本に入ってきたのは今から400年程前。ちょうど有田焼の始まりとその歴史を同じくします。そして、豊臣秀吉の名護屋城の陣地でカルタ遊びをしたことが資料で確認されています。

また、(社)陶都有田青年会議所が中心となって製作された「有田いろはかるた」が出来て、20年余となり、さらに多くの方々に活用していただきたいということになりました。そこで大牟田市の三池カルタ記念館より各地のカルタやランプを借用し、「有田いろはかるた」とともに展示しました。

期間中、有田青年会議所主催の「かるた大会」が焱の博記念堂で開催されました。その折り、8区老人会のご協力で「昔遊び」を体験するコーナーが設けられ、参加した子供たちは竹馬や竹とんぼ、お手玉など、遊びのコツを教えてもらって、次第に夢中になって遊んでいました。

両企画展に関し、ご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。



昔遊びを楽しむ子供たち(焱の博記念堂)

雪竹兼助・雪竹豊吉・松尾徳助・副島虎四郎・福島幸次郎・原清次郎・田代彦四郎・久保時太郎・徳永治太郎・瀬戸口勝太郎・西条直訓・浦川俊蔵・川島祐一・岩尾彦次郎・高島三次郎・林堅八・岡村森三郎・福岡六助・石井友蔵・石井文三郎・松本勘次郎・曲渕通晴・館林与助 以上30名

この時審査員長を務めた有田徒弟学校校長で、日本画家としても著名だった川崎千虎は、折から降りだした牡丹雪を見て、次のように吟詠しました。

「白妙の 雪もふり来て さかつきに

いろをそへたる たまものには」

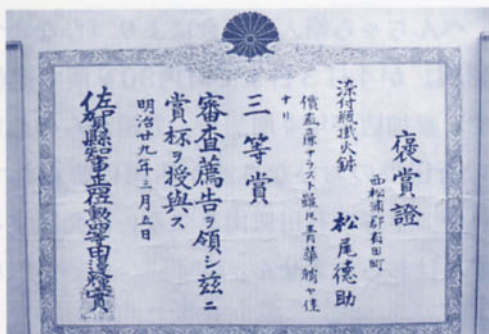
100回の歴史はこのようにして始まったのです。

〔※文中敬称略〕

(尾崎葉子)

〈お願い〉

当館では、陶磁器市の歴史を物語る資料を探しています。表彰状、受賞作品、ポスター、写真など品評会・陶磁器市に関係するものをご所蔵の方は、ご一報ください。(☎43-2678 有田町歴史民俗資料館)



第1回 陶磁器品評会賞状(松尾博文さん所蔵)

※注

①石場騒動 明治23年(1890)有田町議会で石場を有田町の基本財産とすることが議決されたことに端を発し、その後石場の所有権をめぐる窯焼きと一般町民との対立の形で争われた事件

②有田徒弟学校

明治28年5月6日、有田町・新村・曲川村・大山村・大川内村の一町四カ村の組合立「工業補習学校」として出発。同年7月27日有田徒弟学校となる

③五二会

全国の織物、陶磁器、漆器、金属器、製糸・紙製品、雑貨、敷物の7品の当業者を以て組織された会

資料の寄贈

- 古文書 1点 針尾 高巳様 (神奈川県)
- 陶製手榴弾等 3点 中山 武夫様 (岩谷川内)
- 野点用茶器揃い等 23点 辻 光恵様 (白川)
- 大釜 (蓋付き) 1点 辻 公也様 (赤絵町)
- 染付大皿 1点 馬場 敏隆様 (中樽)
- 磁器等 4点 江原佳代子様 (泉山)
- 染付タイル 3点 松尾 博文様 (川崎市)
- 古文書等(皿山雀、雑誌) 3点 前山 博様 (伊万里市)
- 陶片(外尾山周辺採集) 青木 安治様 (外尾山)
- 白磁香炉 1点 正木 光恵様 (宗像市)
- 英文タイプライター 1点 朝重津屋子様 (泉山)

ありがとうございました

こんな本をいただきました

当館には各地の博物館施設や教育委員会などから寄贈された書籍が、年間600冊ほどになります。その中のいくつかを紹介します。

「肥前陶磁器商工協同組合 創立50周年記念誌 同 創立50周年記念 50年の詞」

平成13年7月31日に、創立50周年を迎えた肥前陶磁器商工協同組合が編集・出版。業界を支えた人々の苦労話や、女性たちの活躍などが紹介されています。50年の歴史の中で、戦後の荒廃、不況、バブル期など様々な時代の体験談が、今後の有田を考える基になるのではないのでしょうか。

「肥前陶磁史研究資料

幕末期の肥前有田は薩摩藩の柞灰を求めた
柞灰の山里を尋ねて」 前山 博 著

江戸時代の有田焼は、釉薬として泉山釉石・白川山石などに、日向から仕入れた柞灰を調合して作りました。著者は宮崎県宮崎市の山元家に伝来する御手山関係記録を基に、幕末期の肥前の焼物商人・松尾彦兵衛や深川栄左衛門などの活躍を紹介しています。



平成8年に刊行された「有田の民俗」は駒沢大学倉田教授・太田講師を中心に大変に苦労されて出来上がった内容です。

この中に「有田の年中行事」が紹介されていますが有田には多くの民俗芸能があることがわかりました。

たとえば、年木谷せんたく歌、おろち退治の歌、七福神、蛇踊り、モグラウチ、それに浮立が戸矢、清六、境野、応法、外尾山、外尾町、丸尾などにあり、それぞれの集落で実施されていますが、多くの町民が知らないのが実情です。

やきもの文化を支えているのは、このような地道な民俗芸能であります。

町の文化財保護条例第25条に重要有形文化財と無形文化財指定の条項があります。

昨年「有田蛇踊り保存会」が、今年は「有田町南川良の七福神」が文化財指定申請をしています。このように地区の民俗芸能が、それぞれに活発に活動して、「元気な有田」になってゆけば、川の中で輝く「べんぢゃら」のように光ってゆくのではないのでしょうか。

また、べんぢゃら祭人形部会により「ひなまつり人形展と器展」が4月3日まで町内90ヶ所で開催されています。参加店が年々増加し、先祖からのおひなさまと共に有田焼のおひなさまが店頭飾られています。これが「早春の有田皿山まつり」に発展することを願わずにはおられません。(久富)



季刊『皿山』

通巻53号 (平成14年3月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185